

## 若者たちの生きづらさ：「朝日中高生新聞」投書 記事と回答の語りから

著者	山下 美紀
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要．外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編 = Notre Dame Seishin University kiyo
巻	44
号	1
ページ	131-144
発行年	2020
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000449/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000449/</a>

# 若者たちの生きづらさ — 「朝日中高生新聞」投書記事と回答の語りから —

山下 美紀\*

“Ikizurasa” of Young People

Miki YAMASHITA

## 1. 研究の背景

夏休みの明ける新学期を前に、メディアを中心に「子どもの自殺」予防の特集が組まれて、今年も連日報道された。長い休み明けに子どもの自殺が増加するという傾向は今に始まったことではないが<sup>1)</sup>、ここ数年の子どもの自殺率の高さから、注目度が高まっている。

実際に子どもの自殺数を見てみよう。図1は、厚生労働省・警察庁公表の小学生・中学生・高校生の自殺数の推移を示したものである(厚生労働省・警察庁 2018、警察庁 2019)。推移の特徴を見てみると、とくに中学生において2013年から自殺数が増加している状況がうかがえる。日本人全体の自殺数は減少しているにもかかわらず、若者の自殺数は減少しておらず、死因別理由を見ても、自殺が死因の第1位であることから、日本における若者が何らかの課題を抱えていると言えるだろう。なお、本稿では中学生を主な研究対象としているため、これ以降「子ども」ではなく「若者」と表記する<sup>2)</sup>。

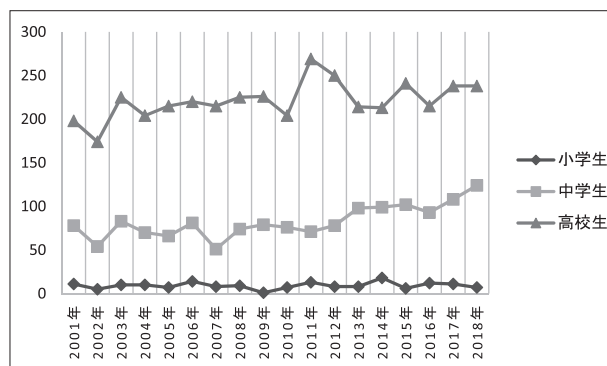


図1 自殺者数の推移

つぎに厚生労働省がこの10年の自殺統計を分析した結果を示しているので、それを参考に自殺の原因について学齢期別に見てみる(厚生労働省 2018)。

キーワード：子ども・若者，生きづらさ，語り

Keywords: Children and young people, “Ikizurasa”, narrative

※ 本学文学部現代社会学科

小学生の自殺の原因を性別で見ると、男子の場合、「家族からのしつけ・叱責」(52.9%)、ついで「その他学友との不和」(17.6%)、「学校問題その他」(16.6%)、女子では「親子関係の不和」(33.3%)、「家族からのしつけ・叱責」(33.3%)となっている。

中学生では、男子は「学業不振」(20.0%)、ついで「家族からのしつけ・叱責」(17.5%)、女子では「その他学友との不和」(22.2%)、ついで「親子関係の不和」(18.8%)となっている。

高校生では、男子は「学業不振」(17.1%)、ついで「その他進路に関する悩み」(16.8%)、女子では「うつ病」(21.8%)、ついで「その他進路に関する悩み」(12.0%)となっている。

高校生になると、自分の成績や進路、病気といった個人的な動機が現れるのに対して、小学生・中学生においては、家族からのしつけや叱責、不和といった家族問題や、学友との不和といった他者とのかかわり方に由来する動機が自殺の原因となっている点は重要なポイントである。

このように死を選ぶ若者が増加し続けている事実を踏まえて、若者の生きづらさに目を向けることは重要な課題であると考えられる。そのために①若者の抱えている課題を経年変化的に整理したうえで、②現代社会に象徴的に使用されている「生きづらさ」という用語について特徴を明らかにし、さいごに③若者自身が感じている「生きづらさ」とはどのようなものであるのかを検討していく。本稿では、新聞への投書記事に着目して、若者の悩みの内容と回答者の語りから、若者がどのような答えを求めているのかを見ることによって、現代の若者の生きづらさの様相の一端を明らかにすることに狙いを定めている。もちろん若者の変化をとらえるためには過去の姿にも目配りをする必要があるが、本稿では近年の若者に焦点を当てていることから、現在の10代が過ごしてきた時代である2000年以降の日本の状況に焦点化していることを先に断っておきたい。

## 2. 子ども・若者に関わる諸問題

### (1) 公的機関実施の調査

まず、内閣府がこれまでに実施した世論調査を手掛かりにして、若者に対してどのような施策が講じられてきたのかを追うことにより、若者の何が問題と目されてきたのかを、時間軸の流れに沿って見ていくことにする。

ある問題状況に対して施策を講じる際に、政府が実施するのが、各種の世論調査・実態調査である。たとえば、不登校やいじめなどの問題状況に対して「児童・生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」が実施されたり、出会い系サイトなどの問題状況に際しては「青少年のインターネット利用環境実態調査」などが実施されたりする。これらの調査は施策立案のために行われるものであるから、子どもや若者の生活状況について、どのように変わってきたのかあるいは変わっていないのかといった、経年変化を追うようなタイプの調査ではない。したがって、今の子どもが昔の子どもに比べてどう変わっているのかという点を明らかにできるものではない。ある時点で生じている問題状況に着目し、その状況の実態を把握しようとするタイプの調査である。逆に言えば、内閣府をはじめとする公的機関が実施している調査及び調査項目を見れば、その時、政府が何を問題視し、その時点において、日本では何が問題とされていたのかを把握することができる。ここでは2000年以降の若者にかかわって実施された調査を見ていくことで、各時点における、若者を取り巻く諸課題を分析していくことにする。

## (2) 若者にかかわる調査の特徴

2000 年以降の調査を見ていく前に、簡単にそれ以前の若者の特徴について伊藤茂樹の論考を手掛かりにおさえておきたい。伊藤は、「1970 年代・80 年代は、子どもの文化が学校との関係性において決まった時代であったが、1990 年代にはいると、学校の影響が低下し、外部社会の影響が強まった」と指摘している（伊藤：2002）。このように、2000 年代以前の若者の問題は、学校にかかわる問題として出現していたことがわかる。つまり、それは学校内で生じる問題であると同時に、学校に対する反抗という形で現れる問題であったと言える。1990 年代に行われた調査には「情報」「薬物」というキーワードが出現し始め、若者を取り巻く状況は、学校だけに内包される類の問題だけではなく、個人が外の社会にむき出しにさらされるようになってきたことを表している。

2000 年代にはいると、調査のキーワードはさらに細くなり、「携帯電話」「情報化」など、情報機器の普及と使用状況が広がりを見せるなかで、若者の情報機器の扱いをめぐる問題行動との関わりに焦点が当てられるようになる。さらに 2007 年以降は、「就労」や「青少年育成」「保護」といったワードが現れるようになり、フリーターやニート、非正規就労の問題や、情報化の進展のなかで、「どのように若者を守り育成していかなければならないか」という課題が立ち現れるようになる。

2010 年代にはいると、若者を取り巻く問題状況が多岐にわたって出現してきた様子が見えてくる。調査のキーワードとして「非行」「薬物」に加えて、「有害環境」「インターネット」「ひきこもり」「仕事」といった具合に、個別かつ具体的な問題が取り上げられるようになってくる。2012 年以降は、「困難を有する子ども」という表現が見られるようになり、若者の状況が「非行」といった一つのワードで問題視されるのではなく、さまざまな社会状況のなかで問題を抱えている様子が見て取れる。

以上、2000 年以降の若者にかかわって実施された各種調査から、各時点において若者の何が問題とされ、課題解決の必要性が模索されてきたかをまとめておいた。まず若者、とりわけ小学生や中学生といった子どもたちが、学校への内包か学校への反抗にかかわらず、いずれにしても学校に関連付けられた問題に対峙していた 1990 年代以前に比して、1990 年代からは情報機器が子どもの生活世界へ浸食し始めたことによって、学校と家という限られた生活領域が融解をはじめめる。これは、子どもたちが、学校と家というフィルターによって外敵にさらされないように守られていたとも言えるし、強固に拘束されていたとも言える。生活領域の融解は、新たな問題状況を出現させる。子どもたちが外の社会と直接向き合うことを可能にさせ、各個人が選択の主体としての立場を獲得するようになった。これは、学校の先生や家の家族といった他者からの拘束や守護からの解放を意味すると同時に、主体者としての責任を負う存在に変化していったということもできる。つまり、子どもといえども「自己責任」の責任主体になってしまったという解釈が可能であろう。

## 3. 「生きづらさ」という感覚

### (1) 「生きづらさ」の登場

これまで、若者の自殺やその原因、若者の置かれている状況について概観してきたが、ここからは若者の心的諸相に言及していきたい。

「死」が若い世代において身近になってきていることを示しているのが、「生きづらさ」

という感覚の蔓延である。

著者は2000年代後半から、子どもの「生きづらさ」に注視してきた。そのなかで、今の世の中が多様性を認めないがゆえに「逸脱」視が安易に行われ、「逸脱」回避を余儀なくされることからくる「生きづらさ」、社会経済的状況の悪化の中で貧困や不安定労働に陥るリスクが高いにも関わらず「自己責任」とされてしまうことによる「生きづらさ」、空気を読み合うような人間関係のなかで、確かな自己肯定をもちづらいという不確かさの中に生きることの「生きづらさ」に言及してきた（山下2012：67-68）。このような傾向が今も引き続き継続しているかどうかを確認しておくことにする。

「生きづらさ」という用語の使用頻度を見るために、朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」を利用し、朝日新聞朝刊・夕刊・アエラ・週刊朝日の各媒体に「生きづらさ」という用語が用いられている記事を検索した。その結果、2019年8月末（現在）において、1,159件がヒットした。「生きづらさ」に着目した始めた2000年代前半にも、年々、この用語が使われる傾向を見出すことができていたが、図2に示すように、ここ数年飛躍的に使用頻度が上がっている実態を見出すことができる。

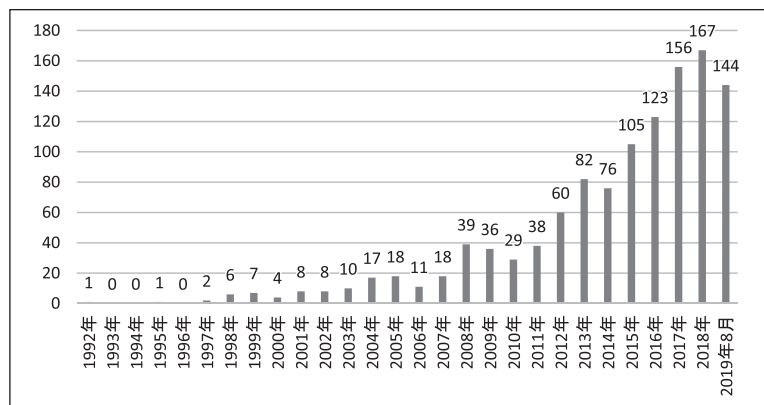


図2 生きづらさ記事数の増減表

さらに、「生きづらさ」という用語がどのような言葉に関連して使用されているかという点に着目して整理してみることにした。

数量的な増減と内容の多様性に着目してみると、大体3期に分けることができた。そこで、1992年初出から2002年までを第1期「生きづらさ発生期」としておく。つぎに、二桁台の前半を推移している2003年から2011年までを第2期「生きづらさ定着期」とする。さいごに生きづらさ記事が量的に増加した2012年以降を第3期「生きづらさ増殖期」とし、各期における記事の特徴を見ていくことにする<sup>3)</sup>。

## (2) 第1期「生きづらさ発生期」

1992年の初出から2002年までは、生きづらさ記事数は一桁台であり、内容も障害に関わるものや自殺といったものであった。内容を示したものが表1である。

	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年
総数	1	0	0	1	0	2	6	7	4	8	8
内容記事数	0	0	0	0	0	1	3	3	1	2	2
障害・発達障害(認知症/AC)						1	1	2			2
不登校(フリースクール)							1				
いじめ							1				
自殺(ネット自殺)								1			
依存症(アルコール・薬物)									1		
男性(メンズリブ)										2	

表1 第1期「生きづらさ発生期」

初出の1992年から2000年代前半は、講演会やイベントの開催告知に関する記事が主なものであった。したがって、記事そのもののなかで生きづらさの内容に触れているものは少ない。そのなかで、「アダルトチルドレン（AC）」や高齢者の問題として「認知症」といった「障害」にかかわる記事が散見されるという点が特徴的である。

この時期は、漠然と人々に意識されていた諸問題が「生きづらさ」といった言葉で表す可能性が生まれてきた時期と言える。だから、アダルトチルドレンや認知症といった誰にでも起こりうる問題であり、「病気」と明確に線引きされない症状を抱える状態を語る「言葉」として発生してきたことがうかがえる。

数は少ないが「メンズリブ」運動が起こり始めた時期でもあり、これまでの男性の生き方や役割の見直しを図る上で直面する男性の生きづらさが生まれていることがわかる。

### (3) 第2期「生きづらさ定着期」

2003年から生きづらさ関連記事が二桁台に増加する。内容も発達障害や自閉症といった「障害」にかかわるものが多くなってくる。それ以外に、アルコールや薬物に対する「依存症」にかかわるもの、非正規労働やニートといった「労働」問題にかかわるもの、「貧困」、虐待やDVといった事項が散見されるようになる。この時期の内容を示したものが表2である。

	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
総数	10	17	18	11	18	39	36	29	38
内容記事数	4	8	3	5	5	9	9	8	8
障害・発達障害(認知症含む)			1			1	3	3	3
不登校(フリースクール)									1
いじめ				1			2		
自殺(2004以前ネット自殺)	1	2	1			2		1	1
依存症(アルコール・薬物)		3		1		1	3		
男性								1	
性・LGBT	1								
ひきこもり	2			1					1
労働(フリーター・非正規)		1	2	2	2	1			
居場所		1						1	
家族(被害者・加害者・自殺)					1	2			
貧困					1		1		2
虐待・DV								2	

表2 第2期「生きづらさ定着期」

この時期は、さまざまな問題状況を「生きづらさ」という用語で表現する傾向が定着していく時期にあたっているといえる。発達障害やアルコール依存症などは個人的な問題のように見えるが、他者との関係において問題状況が発生するという特徴を持つ。誰かとか



かわる時に「普通じゃない」と思われたり、誰も自分の苦しみを分かってくれない、といった他者への期待がその背後に存在している。したがって、本人の問題であると同時に、社会関係における他者の無理解であったり、偏見であったり、関係性における躓きであったりと、個人に由来する部分と社会関係上発生する部分の両方を内包している。

ニート・非正規労働の問題も同じ構造を見て取ることができる。つまり、「働かない・働けない」のは個人の問題とみなされる。しかし、働きたくても働けない、働くチャンスがない社会状況のゆえに陥る問題ともいえるだろう。もともとDVは、「私的な関係性におけるよしなしごと」とみなされる文化的背景の中で見過ごされてきた問題である。それが、DVは暴力であり、暴力による支配であるという思考が広がる中で、私的な問題を公的な社会問題へと転換した事例とみなすことができよう。こうしてみると、この時期に現れてきた「生きづらさ」の諸相は、個人的な問題に帰結させられる可能性を孕みつつ、社会的・経済的・文化的な制約を受けているがゆえに発生するという両面からとらえる必要があるだろう。

#### (4) 第3期「生きづらさ増殖期」

2012年以降、「生きづらさ」関連記事の数は一気に増加する。2012年の60件から年々増加し、2019年8月末の時点ですでに144件を数える。この時期を「生きづらさ増殖期」と位置付けておく。この時期の内容を示したものが表3である。

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年(8)
総数	60	82	76	105	123	156	167	144
内容記事数	14	20	27	34	39	72	69	61
障害・発達障害	3	5	7	4	10	8	12	9
不登校	1		3	1			7	1
いじめ	3	1				1	1	1
自殺	2	2	3	2	2	3	5	1
依存症(アルコール・薬物)	1	1		4	1	7	1	1
男性		1		1	2	4		
性・LGBT	1	4	5	6	10	13	17	10
ひきこもり			1	3	4	9	3	7
労働(フリーター・非正規)		1					2	1
居場所					1	3	3	4
家族(被害者・加害者・自殺)			1	5	1	3	3	5
貧困				3	1	3	1	2
虐待・DV	1			2	1			2
女性(独身・職場・政治)	2	4	5	3	4	8	6	10
異質(肌・外見・人種)		1					3	2
性暴力			1			4	1	1
非行			1				1	
被災					1	1	3	1
ネット					1	5		
承認欲求								3

表3 第3期「生きづらさ増殖期」

内容について見てみると、この時期とくに多くみられるのが「性・LGBT」にかかわる生きづらさ記事である。性的少数者や多様な性に対する問題提起や当事者の視点からの発信が増えている。さらに、「ひきこもり」や「不登校」、さまざまな年代の「発達障害」、女性にかかわる諸問題、例えば、独身でいること、結婚しないことや、職場での扱われ方、

あるいは立場などをめぐって抱える生きづらさが発信されるようになってきた。併せて、男性にかかわる諸問題にも再び焦点があてられるようになってきたことがうかがえる。この他、それ以前にはなかった、「居場所の喪失」や「承認欲求」といったことに関する生きづらさ記事が見られるようになる。

#### (5) 小括

これまで見てきたように、1992年に初めて「生きづらさ」という言葉が登場して以降、年々増加し、いまでは常用的に使用されるようになった言葉と言える。第1期は、個人が抱える、明確に病気とも障害とも判別されない漠然とした状態にある心性を「生きづらさ」という用語で表していた。第2期に入ると、生きづらさにかかわる事項の構造が、明確になってくる。つまり、社会的・経済的・文化的な背景の中で、個人的な問題として収斂させられていた事柄を、あえて「生きづらさ」という用語にのせることによって、社会関係の問題へと連結させる試みが行われるようになった時期とまとめることができるだろう。

その傾向は第3期にも継続されると同時に、発信される内容が具体的かつ多岐にわたって語られるようになる。個人の生き方やありようは多様性が認められるようになっている一方で、依然として社会に存在する「偏見」や「常識」が人々の生き方を脅かし、さらに、「自己責任」によってしか解決しえないという風潮が、現代社会における「生きづらさ」の特徴であると結論付けることができる。

### 4. 「生きづらさ」に関する先行研究

本章では、前章で見たような「生きづらさ」現象に対してどのような研究が行われてきたかを概観しておく。

そもそも、「「生きづらさ」とは何か」、どのように定義づけられるものかという問題が横たわっている。実は、この問いに明確な答えが出せていないのが実情である。これまで「生きづらさ」がどのように定義されているかを探ってきたが、明確に示されているものはほとんど得られなかった。

日本社会学会は、「現代社会と生きづらさ」というテーマで公募特集を組み、『社会学評論』(Vol.66, No.4)に展開している。そのなかで、「生きづらさの一例をあげると、不登校やひきこもり、病い、老い、孤立、マイノリティ、自殺などによる個人の経験である」と示されている。さらに、「生きづらさ」というキーワードは「社会学用語でもない」(大山・有末 2016: 459)。さらに公募特集に載せられた5本の論文のいずれにおいても「生きづらさ」とは何かという定義を試みているものではなく、状況や状態を前提的に示す用語として「生きづらさ」という用語が使われているにすぎない(日本社会学会: 2016)。

フリーライターの渋谷哲也は、1996年ごろから若者の生きづらさについて取材する中で、「さまざまな悩みを感じているけれども、相談できる人がいないか、たとえいたとしてもうまく表現できない、うまく生きられないこと」と生きづらさを定義している。しかし、生きづらさは関係性の問題だけではとらえられない。そこで著者は、子どもの生活状態そのものに着目し、「生きづらさ」を「子どもが認知した緊張を処理するために、生活システムを変える試みを行っても緊張処理が実現できず、現状では緊張処理の可能性が見いだせない状態」と定義している(山下 2012)。関係性の問題や障害といった限定的な事



象ではなく、当該個人の生活そのもののありように着目して、「生きづらさ」の実態をとらえていきたいと考えている。

また、貴戸理恵は、現代社会に増殖する「生きづらさ」の問題を紐解いていくなかで、本人の主観に根差した「生きづらさ」という言葉の使用は、主観的であるがゆえに、個人的な問題へと収斂していき、「個人的に切り抜けるべき」と認識する視線が強くなっているという自己責任の風潮が依然として強く作用していることを指摘する。そのうえで、特定の属性や状態にかかわらず、誰もが「漏れ落ちうる存在」であるがゆえに「生きづらさ」の当事者になりうる時代であることを主張する。だからこそ、生きづらさの原因と目される個人的な事情が問題化されていた時代から、当事者を取り巻く関係のなかで受け取るべきものであるという問題化の立て方へと変化している兆しに救いの道を見出そうとしている。つまり、「個々の「生きづらさ」を、いかに関係性や社会へとつなげていくことが出来るか」が、生きづらさ社会における課題であるという指摘である（貴戸 2014：22-29）。

教室のなかでの子どもたちの人間関係を考察している土井隆義は、お互い地雷を踏まないように対立を回避して、高度な気遣いのなかで成立している子どもたちの生きづらさに迫る（土井 2008）。さらに、近年の若者たちの人間関係の特徴として、友人よりも家族を大切だと考える割合が高まっていることに触れ、「生得的属性を根拠にして連帯感を得ようとする心性には、流動化が進み現代社会で揺らぎやすくなった人間関係への不安」と「けっして揺らがない属性に根拠づけられた人間関係への憧憬」があると述べている（土井 2019：103）。

NHK 放送文化研究所は「中学生・高校生の生活と意識調査」を 1982 年から行っており、2012 年に実施した調査との比較した結果を示している（NHK 放送文化研究所 2013）。それによると、この 30 年で、子どもたちの悩みごとの相談相手に変化が見られるという。30 年前は悩みごとの相談相手に友人が選ばれていたが、この 30 年でその割合が減少し、代わりに母親が選ばれる割合が高まっていることが示されている。

先に、子どもの自殺数及び自殺の原因について言及したが、そこでは、小学生・中学生において家族問題が大きなポイントであることを指摘しておいた。上記のように近年の若者にとって、家族の求心力の高まり傾向が見られる一方で、若者たちの自殺の原因の 1 位が家族問題であるというのは非常に示唆的である。つまり、子どもや若者にとって、家族に対する重要性が高まれば高まるほど、家族との関係がうまくいかないという事態は、当人の存在そのものの基盤を脅かす危険因子になってしまうということを意味するといえよう。

## 5. 「若者の生きづらさ」の分析と考察

### (1) 分析対象資料

本章では、若者、なかでも中学生を中心に、生活上の生きづらさに迫っていききたい。ここでは、朝日学生新聞社発行の「朝日中高生新聞」の「ヒヤダ兄さんがノリノリで相談にノりますよ」のコーナーに載せられた記事を分析対象とする。もともと朝日学生新聞社は 1975 年から中学生を対象とした「中学生ウィークリー」を発行してきた。それが 2014 年 10 月 4 日号から「朝日中高生新聞」と対象者と内容を変え発行を続けている。新たな体制になって、翌 2015 年 4 月 5 日号から当該コーナーが動き出した。

ここでは投稿された記事を回答者であるヒヤダイン<sup>5)</sup>が紹介し、その悩みに対してヒヤダインが回答するという形式を採っている。このような記事を分析対象に設定する意義と

して、投稿者である中学生・高校生たちが、自分や他者をどのように理解し、表明しているかを見出すことができるという点が挙げられる。さらに、新聞記事上での開示は、他の読者の存在を前提とするものであり、そこでのやり取りは、すべての読者（つまりは、読み手である中学生や高校生たち）において共有された状況の経験とみなすことができる。ある一人の投書記事は、投書はしていないが同じ経験をしている他の読者の悩みであり、回答を得る経験となることを意味する。したがって、投書記事は個別具体的な内容ではなく、誰にも普遍化され、共有されるものであると同時に、ヒヤダインの回答は投稿者への個別的な回答ではなく、同じ経験をしている読み手すべてに対するメッセージといえる。

## (2) 相談内容の特徴

記事は2015年4月5日から2019年8月25日号までの229件を対象とした。紙面に何を取り上げるかは、編集部および回答者のヒヤダインの選定によるところが大きいので、非常に恣意的である。しかし、一定程度の特徴を見出すことができるため、その特徴について言及しておく。

まず、投稿者の性別は、女子が154件、男子が48件、不明27件となっており、女子の投稿が多い。つぎに投稿者の学年は、中1が21件、中2が47件、中3が55件、高1が34件、高2が32件、高3が17件となっており、中3がもっとも多く、次いで、中2、高1であった。『子供・若者白書』などを参考に「不登校」や「少年犯罪」などの問題行動の発生時期を見ると、15歳から17歳の時期がもっとも多く、問題行動の根本原因となる悩みの多さと比例している点が非常に興味深い。

相談内容については、①「勉強のやる気だす方法は？」といった勉強の仕方や成績アップの方法を尋ねた「勉強」、②「友だちって必要？本当の友だちって？」といった具合に友だちの必要性や友だちとのいさかいなどについてアドバイスを求めた「友人関係」、③「部員たちが全く団結しない」といったような部活や学校生活における悩みを相談している「学校・部活関係」、④「告白成功！でも話せず振られた」などの告白の是非や恋愛の悩みを相談している「恋愛関係」、⑤「やりたいことが無い、進路どうしよう」といった将来の進路や夢に関してアドバイスを求めた「進路・夢」、⑥「自信がなく、虚言癖があります」といった自分の性格や態度について悩みを相談している「自分自身」、⑦「親との付き合い方にモヤモヤ」といったような親との関係において問題を抱えアドバイスを求めた「家族関係」の7カテゴリーに分けておいた。

## (3) 回答の語りからみる特徴

先にも述べたように、相談内容は編集部等でまとめ直されており、投稿者の語りをそのまま読み取ることができない。そこで、回答者であるヒヤダインの語りにおけるメッセージを分析することにより、場を共有する読み手の求めているものを、期待していることを描き出していくことにした。

### カテゴリー①「勉強」

「成績下がった、効果的な勉強方法は」（2017年2月26日・中1・男子・ムーンライトsm）に対して「試して失敗して自分流を見つけろ」とアドバイスする。そのうえで、「こ

の手のお悩みには厳しくいくよ」と前置きしたうえで、「『効果的な勉強方法』を知りたいらしいけど、そんなもんねえよ！！あるか！」と切り捨てる。「自分のダメさにイライラしながらも」もがくことの必要性を強調する。

「数学の点数を伸ばす方法は？」(2019年2月10日・中3・男子・トナカイ)に対しては「まずは自分の上限レベルを探そう」と答える。「だけど勉強ってね、したらしただけ貯金されて、いつかドカーンと爆発するときが来るんだよ」とアドバイスを送る。この他にも繰り返し「勉強しろ、じゃまにはならない」と語る。

勉強について、ヒヤダインは成績や進路のためではなく、自分のいつかのために貯めておくことの重要性を説くと同時に、プライドを捨て自分のレベルを知ること、つまり自分自身を客観的に把握することの必要性を繰り返し説いている。

#### カテゴリー②「友人関係」

「仲良しの友だちがすぐにすねる」(2016年2月7日中2・女子・くり坊)という相談に「相手を考えない人に謝る必要ナシ」と回答する。そのなかで「くり坊さんは悪くないですよ！」としたうえで「その友達を大切に思うならそのひんまがった性格を治してあげなきゃね。大変な道のりだから見捨てたっていいと思うよ」とアドバイスを送っている。

「評判悪い子との付き合い方は」(2016年7月10日・高1・HONESTGIRL)という相談に対しては「ケンカする覚悟でぶつかれ」と思いきりぶつかっていくことを勧めながらさいごには「でもそれは本当に疲れちゃうことだから、見捨てるのも一つの方法だよ。見捨てても君は悪くない」というメッセージを送る。

友人関係における悩みにおいては、投稿者をまず受け入れるところから始まり、正面からぶつかるようアドバイスし、最終的にはその関係を切り離してもかまわないという流れである。

#### カテゴリー③「学校・部活関係」

「部活の練習を効率よく進めるには」(2017年7月2日・中3・女子・ミントホテル)に対して「完璧なリーダーにならなくていい」と回答している。ここでヒヤダインが問題にしているのは、部の練習のやりくりの問題ではなく、投稿者が「自分が部員に迷惑をかけているかもしれない」と自己否定している点にある。「自分を追い込んで焦ってしま」っている様子に、「あまり自分を責めない方がいいよー」という自己受容のエールを送る。

「薄着でマラソン」の伝統なくしたい」(2016年12月6日・中3・男子・めだかドーナツ)に対して「校則改正は大変、正義感と相談を」と回答している。「おかしなことを正したい」という正義感は重要だとしつつも、「現実問題抗うのは大変。だから甘んじて耐えることも決して逃げではないと思うよ」とアドバイスを送る。つまり、投稿者の正義感を認めつつも、実際問題、改正に携わる過程とその結果を考えたときに、挫折する可能性を見つつ、逃げ道を作っていることがわかる。

#### カテゴリー④「恋愛関係」

「恋愛せずとも一人で生きていける？」(2017年3月12日・女子)に対して「人生の優先順位、決めるのは自分」と回答している。「恋愛願望がなくて何が悪いの？」「そもそもね。恋愛しない＝一人で生きてくって考え方古くない？」と恋愛することが当たり前とい

う前提の問い直しを行ったうえで、「人生のなかの優先順位なんて、「常識」や「社会」が決めるものじゃない。あなた自身が決めればいいもんだ」と語る。

「彼は受験生、連絡すると邪魔？」(2017年9月3日・高1・女子・にと)に対して「大きく勘違いしていることがあるよ！」としたうえで、「いやなこと言うけどさ、本当に彼のこと「愛したい」と思っている？それよりも「愛されたい」方が強いんじゃない？」と鋭く指摘する。さいごに「見返りを求めないで愛を与えなさい」と回答している。恋愛に関しての投稿では、主体が自分であることを問う語りが多く見られる。「相手から何かしてもらう」のではなく、自分は何をするのかという主体である自覚を強く求めているという特徴がある。

#### カテゴリ⑤「進路・夢」

「やりたいことがない、進路どうしよう」(2015年6月14日・高1・女子・のん他)に対して「夢発見に備えてやっぱり勉強だ」と回答している。「中高生全員、夢を持って！なんて乱暴だよ！」「夢ってどのタイミングで発見できるか分からない」のだから「いつかやってくるそのタイミングのためにいろんな仕込みをするべきだと思う」と語る。

「やりたいことが見つからない」(2018年5月27日・高2・女子・REN)に対して「限界決めずに少し背伸びして」と回答している。「勝手に限界決めるな」「私なんて」って思っている限りこの先の人生、何一つかなわないよ？」「変えてもらうんじゃない。変わるんだよ」と発破をかける。

何も努力をしていないのに、自分で諦めようとする姿勢に対して檄を飛ばす傾向にある。「何年続けた？」「どれだけ書いた？」と問い、人と比較して諦めるのではなく、自分がもがくことを求める。

#### カテゴリ⑥「自分自身」

「学校でおちゃらけ、帰宅後に後悔」(2015年8月25日・中2・女子)に対して「理想高い！自分否定するのやめよ」と回答している。ヒヤダインは悩みを聞くなかで、今の若者たちが「自分を否定すること」が多いと感じており、それに対して「もうさあ、みんな。自分を許してあげようよ」とし、なりたい自分になれないことに対して「自分を責めることは少しやめてみませんか？」と問いかける。

「誰に対しても極度に負けず嫌い」(2017年4月16日・中2・女子・しらたま)に対して「ダメな自分も好きになってあげて」と回答する。この投稿に対して「ズバツと言おう。あなたは人を見下したいのだ」としたうえで、「優秀かもしれないけど「自信」という面では誰よりも劣等生」と指摘する。人と比較することで自分の存在を確認するのではなく、自分を認めて揺るがない自分を持つてほしいとエールを送る。

#### カテゴリ⑦「家族関係」

「希望の進路を親に反対されそう」(2015年6月21日・高2・女子)に対して「人生の大イベントではガチげんか！」と回答する。そのなかで「「親」って絶対正義じゃないんだよ。親も「親」以前にただ一人の人間」としたうえで、「親が間違えることもあるよ」と回答している。



「親が離婚、友達の家族話が憂うつ」（2015年9月6日・中1・女子・鯖子）に対して「ポップに悩み明かせば楽になる」と回答したうえで、さらに続けて「親になるならちゃんとしろ！離婚するような状況になってんじゃねえよ」、「こんなこと悩まなきゃいけないなんてほんとにいい迷惑だよ。災難だよ」と親を切り捨てる。

この他にも「親離れも子離れもできなくて、ずっと互いに依存した状態で非常に不健康だ」とし、多くの家族関係の投稿に対して、親と距離を取り、親と自分の切り離しを行わせるような回答を繰り返している点が特徴的である。

親からの自立を求める語りは、生活主体であることを意識させるものである。すべての回答において立ち現れるモチーフが「人生の主体」という点である。

人生の目標にしても、自分で決めること、交友関係においても、関係をただ継続させたり、絶交したりすることを求めるのではなく、自分はどうすべきかを自分で考えることを求めるという構造になっている。

## 6. 若者たちへのメッセージ終わりに代えて

はじめに述べたように、日本の若者の自殺は増えている。さらに置かれている社会的・経済的・文化的状況も変化している。それでは、若者たちの抱える悩みも変わっているのだろうか。今回の投書記事を分析した限りにおいて、今の若者たちが特別な悩みを抱えているとは言えない。では、どこに特徴を見出すことができるか、さいごにこの点に言及しておきたい。

先にも述べたように若者たちの悩みは、自分自身の性格であったり、家族との関係であったり、進路や勉強であったりとさまざまである。ここで注意したいのは、回答者であるヒヤダインの回答の語りである。彼の語りから、①きつい表現、②自己受容・現状受容を説く、③他者と自分の切り離し、④「主体」の自覚の覚醒、といった4つの特徴を挙げることができる。

回答の中で、しばしば使われるのが「残酷だけど」、「キツイことを言いますよ」、「意地悪な言い方だけど」といった①きつい表現である。こういった語り口は、回答者の「本気」と「本音」という姿勢であると読み手に受け止められる効果を持つ。このような甘くない「本音」が多用される裏側には、「本音の語り」を相談者および回答者、そして同時的に場を共有している多数の読み手たちの「共感」と「カタルシス」をもたらすと考えられる。

つぎに、「少しはあきらめることも必要」、「ダメな自分も好きになって」、など「認める」「あきらめる」「受け入れる」という②自己受容・現状受容を促す語りが見られる。実は、「自分を認める」という作業が、現代の若者にとっては非常に難しいことかもしれない。「生きづらさ」関連記事においても近年「自尊感情」という用語が見られるようになってきたことから推察できるように、日本の若者の自己肯定感や自尊感情の低さはつとに指摘されている（古荘2009など）。回答の中にあったように「ダメな自分を責めるんじゃない、ダメな自分でもなんとかなる環境作れ」というメッセージは、若者にとって、ただ単に自分のダメさを自覚するのではなく、他の手立てに目を向けられるような、解決の道筋となっていることがわかる。

池田曜子は、大人（＝教師）の側にも、子どもの側にも「子どもらしい＝好まれる子ども」というフレイミングが存在していること、さらに、好ましい子どもは「率直で元気な

子」であり、「自分をほとんどださない」「誰からもよい子だと言われ」るような子が歓迎されず、子どもたちはあえて「子どもらしく」努めなければならないことを発見している(池田 2016)。

「好ましい人間」というフレイミングに拘束されている現代の若者にとって、「そのままでよい」というストレートなメッセージは、解放の意味をもたらすと言えるだろう。

さいごに、友人との関係においても、家族との関係においても、「見捨てるのも一つの方法」、「仲良くする義務はない」という③他者との切り離しの実践を求める語りが見られる。「友人だから、家族だから離れられない」という悩みに対して、「向き合っても分かってもらえない関係なら切り捨てろ」というスタンスをとる。つまり、他者の価値観と自分の価値観の切り離しである。これは4つ目の特徴④「主体」の自覚の覚醒とも重なるが、自己と他者の共依存・共犯関係から解放し、他者を周縁化することによって、自分の人生の「主体」であることを覚醒させるメッセージであるといえる。

①きつい表現、②自己受容・現状受容を説く、③他者との切り離し、④「主体」の自覚の覚醒という回答の語りの特徴は、裏を返せば、今の若者の生きづらさの一端とみなすことができる。つまり、若者の生きづらさとは、本音で誰かから意見を言ってもらえる機会の少なさ、自分を出せず、自分を認めることができない状況、みんなとうまくやっていかなければならないという人間関係に拘束されていること、自分が人生の主体であるという感覚を持ちにくい状況などに特徴づけられることを明らかにすることができた。

今後の課題として、回答者からのメッセージが、受け手としての読者である若者にどのように受け止められているかという点についての検証の必要性を挙げておく。また、回答者であるヒヤダインの回答の論調に、近年変化が見られることの理由についても併せて検討したい。

## 注

1)：厚生労働省 過去日程別の自殺数、「我が国の自殺をめぐる状況」p.6

「②18歳以下の自殺者は、学校の長期休業明け直後に増える傾向がある」

4月6日～8日前後、5月4日～9日前後、もっとも多いのが夏休み明けの9月1日(約130人)となっている。

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyo/kyokushougai/hoken/fukushibu-Kikakuka/0000147193.pdf#search=%27%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81+%E8%87%AA%E6%AE%BA%E5%8E%9F%E5%9B%A0%E5%88%86%E6%9E%90%27>

2) 本稿では、「子ども」「若者」といった用語を使用している。「子ども」には定まった定義がなく、各種法令においても用語法がまちまちである。「児童の権利条約」では児童(Child)は18歳未満の者を指すが、年齢幅が広く、焦点が定まらない。そこで、本稿では、もっとも問題行動の発生が多くみられる思春期にあたる年齢の者を対象とし、「若者」と表記することにする。なお文脈上、「子ども」という表記を行う場合もある。

3)：生きづらさについて言及されて語られているものをそれぞれ出現の古いもの順に表している。内容については、表現の異なりはあるものの同じ内容を示すものを一つのカテゴリーとした。その結果「障害・発達障害」「不登校」「いじめ」「自殺」「依存症(アルコール・



薬物)」「男性」「性・LGBT」「ひきこもり」「労働(フリーター・非正規)」「居場所」「家族(被害者・加害者・自殺)」「貧困」「虐待・DV」「女性(独身・職場・政治)」「異質(肌・外見・人種)」「性暴力」「非行」「被災」「ネット」「承認欲求」の20項目に分けて分類している。

さらに、掲載数が3以上のものに網掛しており、量的特徴がわかるようにしておいた。

4)「朝日中高生新聞」の前身である「朝日中学生ウィークリー」は1975年から発行されている。紙面構成は変化しているものの、投書記事のコーナーは設置されている。これからの課題として、投稿された若者たちの悩みの内容の特徴・変化について精査していく予定である。

5)回答者であるヒヤダインについて、朝日中高生新聞のプロフィールを載せておく。「(本名・前山田健一)。音楽クリエイター。1980年生まれ。京都大学卒業後、本格的な音楽活動をスタート。さまざまなアーティストに楽曲を提供し、自身もタレントとして活動している」

#### 引用文献

池田曜子,「再生産される「子どもらしさ」:好ましいとされる子どもをめぐる語りから」『子ども社会学研究』, Vol.22。

伊藤茂樹, 2002,「青年文化と学校の90年代」, 日本教育社会学会『教育社会学研究』70(0)。

NHK放送文化研究所, 2013,『中学生・高校生の生活と意識調査』, NHK放送文化研究所。

貴戸理恵, 2014,「「生きづらさ」の増殖をどう考えるかーみんなが「当事者」になる時代」, 『季刊 福祉労働』, 第124号。

厚生労働省・警察庁, 2018,「平成29年中における自殺の状況」。

土井隆義, 2008,『友だち地獄』, ちくま新書。

土井隆義, 2019,『「宿命」を生きる若者たち』, 岩波ブックレット。

内閣府, 2018,『子供・若者白書』。

日本社会学会編, 2016,『社会学評論』Vol.66, No.4。

古莊純一, 2009,『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』, 光文社。

山下美紀, 2012,『子どもの「生きづらさ」』, 学文社。

警察庁, 自殺者数「平成30年中における自殺の状況」

<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html>

厚生労働省,「我が国の自殺をめぐる状況」

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000147193.pdf#search=%27%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81+%E8%87%AA%E6%AE%BA%E5%8E%9F%E5%9B%A0%E5%88%86%E6%9E%90%27>